

# ICT を活用した外国にルーツを持つ 児童の学習支援の研究

中国にルーツを持つ児童をケースとして

SHANG Fangfang

世界におけるグローバル化の進展はめざましい。日本もその例外ではなく、近年、外国人居住者の増加とともに、外国にルーツを持つ児童は増加している。しかし、外国にルーツを持つ児童たちに対する DAISY 教科書活用はかならずしも進んでいないのが現状である。筆者は、大阪公立小学校 S 校における中国にルーツを持つ児童 2 名に対して、母語と「やさしい日本語」による学習支援と ICT ツールを組み合わせる新たな学習支援を試みた。本論文においては、ICT を活用した外国にルーツを持つ児童の学習支援の有効性について、支援実践に基づき考察する。

支援前後に実施した支援児童の読み能力検査等の諸検査、放課後教室や家庭での支援活動や正課での授業での参与観察調査、そして、校長、担任、児童、その保護者に対するインタビュー調査に基づき、ICT 学習支援の効果の考察は、以下のようにまとめられる。

## 1) DAISY 図書の読み学習支援のツールとしての優位性について

支援対象児童の L さんと N さん 2 人とも、iPad で DAISY 再生ソフト「イーリーダー」を使って、音声速度やルビの有無などを自分自身に合わせて(カスタマイズして)、音読学習に活用することができた。因果関係はまだ科学的に検証するまでには至らなかったが、結果として、2 人とも音読能力は上がっている。

また、既存の DAISY 教科書は文(センテンス)単位で、ハイライトと音声が付与されているために、文が長い場合、最初から繰り返して聞かなければならない。こうした効率の悪さが、子どもたちのやる気を奪う場合がある。こうした不備を改善するためには、文節単位にハイライトさせ、音声を連動させるよう、DAISY 教科書の作り直し(もしくは、再生ソフト側で管理できるようにすること)が必要となるだろう。

2) ICT ツールを使用した学習支援ネットワークが、時間と空間の制約を超えることを可能とする点について

こうした ICT を活用した学習ネットワーク形成の特徴によって、様々な支援者たちの協働により、従来の人的資源や財政的枠組の制約を突破できることに確信を持た。とりわけ、外国にルーツを持つ児童の支援者としては素人の学生・留学生も支援ネットワークの中に参画しえたことを実証できた点は、今回のプロジェクトの大きな成果と言える。

3) ICT ツールが、子どもたちの学習する姿勢を、受動的学習から能動的学習に変える契機となる点について

ICT ツール(DAISY 教科書)の利用が、ただちに受容的学習を能動的学習に変容させるわけではない。支援対象児童の嗜好性・性格・言語能力・文化資本などにも依存するからである。本研究においては、支援対象児童の特徴を見極めたうえでワークシートを制作し、DAISY 教科書による国語学習の有効性を高めることを目指した。支援対象児童の感想からも垣間見えるように、「ICT 支援+母語支援+やさしい日本語による支援」というフレームが有効であることは明らかであろう。それに加えて、iPad における既存の学習教育用アプリのゲーム性も、児童の学習意欲を喚起・維持するうえで、有効であると言えるだろう。

今回の支援では、国語教科書の学習単元ごとに、本文の中国語での全文翻訳を試みた。またワークシートでは、キーワードの日本語・中国語の対訳を試みている。こうした紙媒体での学習補助教材は、外国にルーツを持つ児童の ICT 学習支援において、母語教育に基盤する日本語学習支援を展開するうえで、不可欠なものとなる。日本文 1 行、中国語 1 行という中日対訳形式のテキストは、外国にルーツを持つ児童にとって、教材内容理解の深化とともに、母語獲得・保持にも役立つ。

4) ICT ツールが、自学自習に依拠した学習支援に向いている点について

今回の支援では、iPad を対象児童に貸与し、家庭でも iPad を利用して勉強できるようにした。昨年度までの支援では、学校側からこうしたチャレンジは認可されなかったとのことである。今回は S 小学校校長の前向きな姿勢もあり、保護者との間で確認書を取り交わすというプロセスを経て、家庭への iPad 貸与が実現した。これにより、ICT ツールを活用した学習は学校だけでなく、家庭でも可能となり、こうした ICT ツールの管理を児童が自分の力ですするという意識を持つようになり、自律・自立意識が養われたように思われる。

今回の支援では、iPad をインターネット環境下で使用することは控えた。しかしながら、国語教材で日本特有な文化(方言も含めて)など翻訳も難しい部分については、子ども自身に分からないことをインターネット経由で調べさせていくことも重要であろうと思われる。そうした ICT リテラシ

一能力を身に付けさせることができれば、自学自習を画期的にステップアップすることができるだろう。

5) ICT 学習支援は、支援やサポートが乏しい環境下に置かれている生徒・児童に対する支援システムとして有効であると思われる点について

「ICT 支援+母語支援+やさしい日本語による支援」という学習支援が機能したのも、母語支援者が対面的な支援に入ることができたことが大きい。しかしながら、筆者がこの3月からは支援から離れざるを得なくなる。母語支援者がいない外国にルーツを持つ児童や学校で十分な支援が得られていない児童、そして、不登校もしくは未就学児童の学習支援環境を改善するうえで、ICT を活用した学習支援システムへ対する期待は高い。筆者としては、3月以降の2人の支援の在り方を継続して考えて行きたい。

ICT ツールを活用した学習支援ネットワークは、時間と空間を超えるところに、その最大の強みがある。今回の支援プロジェクトに参加したのは、立命館大学教授、日本人学部生、留学生であったが、これに加えて支援児童の母国の関係者、大学、NPO 団体などの組織をこのネットワークに加えることができれば、ICT ツールを活用した学習支援ネットワークはさらに強化されるだろう。

今後は、中国にルーツを持つ児童だけでなく、多くの外国にルーツを持つ児童が利用できるように、ネットワークを拡大し、多言語での DAISY 教科書を開発することが期待される。こうした支援によって、外国にルーツを持つ児童が日本社会の中で日本語の壁を突破でき、より良い教育を受けることができれば、将来の日本社会を支える成員として成長していくことができる。こうした社会全体の視点から、日本社会はマイノリティ児童の学習支援を重大な課題だと認識すべきであろう。